

ゼベダイの妻サロメの物語

2021/10/14 井田 泉

十字架にかけられた主イエスを見つめていた女の人たちの一人に「ゼベダイの子らの母」(マタイ 27:56)がいます。ゼベダイの子らとは、ヤコブとヨハネのことです。可能性の域にとどまりますが、彼女の名前はサロメ(マルコ 15:40)で、イエスの母マリアの姉妹(ヨハネ 19:25)だったかもしれません。その場合、イエスと、ヤコブおよびヨハネは従兄弟だったこととなります。もちろん確かめることはできませんが、そのような想像を試みるのもまた興味深いことではないでしょうか。

わたしの夫はゼベダイといます。ガリラヤ湖の漁師です。雇い人もいて、かなり大きな仕事をしており、この界隈ではよく知られていました。わたしたちにはヤコブとヨハネという二人の息子がいます。いずれも小さいときから利発で、また人への思いやりがある子どもたちでした。兄ヤコブのほうが目立つタイプで、弟はよく「ヤコブの兄弟ヨハネ」と呼ばれていました。少年の頃から二人は夫のゼベダイを助けて、雇い人たちと一緒に漁師の仕事をしていました。二人とも人の話をよく聞く、思慮のある子どもたちなのですが、正義感が強く、時折感情を爆発させるところがありました。それが心配と言えば心配でした。

成人してから、二人はあるとき、イエスという方に出会いました。夫ゼベダイが言うには、ちょうどそのとき、夫は息子たちと一緒に舟の中で網の手入れをしていたそうです。イエスが二人を呼ぶと、二人は夫と雇い人たちを残してイエスに付いて行ったとのこと(マルコ 1:20)。

家業を放り出したわけですから、わたしも夫も非常に困惑し、心配しました。けれども息子たちの勧めもあって、この方の話を聞いたりしているうちに、わたし自身も引きつけられるようになりました。この方の説く「神の国」がありありと迫ってきました。心のいちばん深いところに慰めが満ち、また生きることの目標と励ましが与えられました。イエスに従って神さまの求められる愛と正義と平和が満ちた世界の実現のために尽くそうと、わたし自身が願うようになったのです。

息子たち二人に加えて、わたしまで家を空けることが多くなったのですが、夫ゼベダイは不満を言うこともなく、相変わらず漁に精を出していました。時々、イエスの話を聞きに来たりもして、そのときは非常に真剣な、また満ち足りた表情を示していました。多くを語らない夫も、「信者」になっていたように思います。

イエスさま（ここからはこう呼びます）は、二人の息子たちを非常に信頼してくださり、ほとんどいつもそばに置いてくださるようになったようです。息子たちは十二使徒と呼ばれる中に入れられ、さらにシモン・ペテロとともにとても重要な役割を与えられるようになりました。イエスさまは息子たちに「ボアネルゲス（雷の子ら）」というあだ名を付けられました（マルコ 3:17）。性格をよく見抜いておられたのだと思います。

あるとき、ヤコブとヨハネはペテロとともにイエスさまに連れられて高い山に登ったそうです。山の上でイエスの様子が変わり、顔と衣は光り輝いた。そこに遠い昔の指導者モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた、と。またそのとき、雲に包まれたなかで、「これはわたしの愛する子。これに聞け」という声が響いたそうです（マルコ 9:7）。それは恐れ多いことですが、神さまの声だったに違いありません。

わたしも他の女の人たちと一緒に、イエスさまとその一行に加わり、生活や宣教の働きに奉仕しました。それは非常な喜びでした。息子たちと同じ思いで働けるのをどんなにうれしく思ったことでしょうか。けれども、イエスさまが貧しい人や病気の人、虐げられた人たちの支持と信頼を受けるほど、ファリサイ派やサドカイ派、律法学者といった力を持った人々から迫害されるようになりました。それは次第に、イエスさまの命を脅かすものとなってきました。わたしたちも、有力者たちからは憎しみと軽蔑の目で見られました。

あるとき、ヨハネの憤る声が聞こえました。

「先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ました。わたしたちと一緒に先生に従うように言ったのに、従って来ようとしません。にもかかわらず先生のお名前を使っているのをやめさせました。」（ルカ 9:49）

するとイエスさまの声がしました。

「やめさせてはならない。あなたがたに逆らわないのなら、あなたがたの味方なのだから。」

主イエスさまは、危険なエルサレムに向かって進んでおられました。わたしたちは心配しながら従って行きました。途中サマリア人の村に入ろうとして、イエスさまは準備のために使いを出されました。わたしたちユダヤ人とサマリア人とは一般に犬猿の仲でしたが、イエスさまはサマリア人のことを大切に思っておられました。けれども村人はイエスさまがエルサレムに向かうと聞いて、歓迎しませんでした。それを知ったヤコブとヨハネは激怒して言いました。



「主よ、お望みなら、天から火を^{くだ}下して彼らを焼き滅ぼしましょうか」(ルカ 9:54)

イエスさまは息子たちを叱責されました。息子たちにはイエスさまの思いが分かっていたのです。けれども二人がイエスさまを愛するあまりに村人の態度に憤ったことは、分かってやりたいと思います。二人はイエスさまと一緒に死ぬ覚悟を決めていたのではないかと思います。それにしてもイエスさまが二人を「ボアネルゲス(雷の子ら)」と呼ばれたことは、こんな仕方での中したことになります。

イエスさまは十二弟子にこう言われたそうです。

「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」(マルコ 10:33-34)

恐ろしいことでした。わたしたちも前に同様のことを聞いていたのですが、いよいよその時が迫ったのを感じました。イエスさまが死なれたとき、息子たちはどうなるのか。死ぬ覚悟をしてここまで従ってきた二人の思いを、イエスさまに汲み取ってほしい。わたしも覚悟を決めて、あらためて二人をイエスさまに献げる決心をしました。あんなに主を慕っている息子たちです。どんなことが起こっても、イエスさまには二人を見放さず、ご自身の傍らにおらせてほしい。その思いがわたしの中で募りました。

わたしはヤコブとヨハネを連れてイエスさまのところに行って、ひれ伏しました。イエスさまが「何が望みか」と聞かれました。わたしは言いました。

「わたしの二人の息子が、あなたのみ国で、一人はあなたの右に、一人はあなたの左に座るとおっしゃってください。」(マタイ 20:21)

愚かな母親と思われてもよい。わたしの中に、息子たちがイエスさまから特別扱いを受けることを願う、地上的な人間的な思いがなかったとは言えません。けれどもわたしとしては、イエスさまのことを命を賭けて愛している息子たちのことを、イエスさまに知ってほしかった、息子たちを傍らに置いてほしかったのです。

主はこう言われました。

「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲むことができるか。」

二人は「できます」と答えました。

するとイエスさまは「確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになる」と言われました。わたしはこの言葉を聞いてドキッとしました。息子たちの将来をイエスさまは予見しておられるのだろうか。

イエスさまは続けてこう言われました。

「しかし、わたしの右と左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、わたしの父によって定められた人々に許されるのだ。」

ほかの十人がこのことを聞いて腹を立てたのは当然だと思います。

やがてイエスさまはエルサレムで捕らえられ、不当な判決を受け、ゴルゴタの死刑場まで引かれて行きました。わたしたちはその後について行きました。十字架につけられたイエスさまを、祭司長たち、律法学者たち、長老たちがののしり、侮辱しました。イエスさまの頭の上には「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と書いた罪状書きが掲げられていました（ヨハネ 19:19）。



昼の 12 時から全地が暗くなり、それが 3 時まで続きました。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」（わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか）というイエスさまの叫びが聞こえました。だれかが「この人はエリヤを呼んでいる」と言いました。イエスさまは再び大声で叫んで、息を引き取られました。

この一部始終を、わたしは、ガリラヤから一緒にイエスさまに従って来た女の人たちとともに見つめていました（マタイ 27:56）。あまりの痛ましさに気を失いそうでしたが、しかし自分たちは正しい方を信じてきたし今も信じている、という思いが自分を支えていました。

それからわたしたちはイエスさまの復活を経験し、また聖霊の降臨を経験しました。わたしはずっと、イエスさまの母マリアとともにいて祈り、誕生したての教会を支えました。

10 年あまりたって、エルサレムの教会に対する迫害が起こりました。そのとき、ヘロデ王（ヘロデ・アグリッパ1世、ヘロデ大王の孫）は手を伸ばし、わが子ヤコブを剣で殺しました（使徒 12:2）。かつてイエスさまが「あなたがたはわたしの杯を飲むことになる」と言われたことが蘇ってきます。ヤコブは主の杯を飲んで死んだのです。これによってわたしは、主の母マリアといっそう強く結びつけられました。

弟ヨハネのほうは迫害からかろうじて逃れ、宣教と牧会に献身しています。

あのときわたしが息子たちのために「あなたの右と左に」と願った思いは清められて、いつか必ず、み国で多くの人たちと一緒に、イエスさまを囲めることを信じています。その幸せな未来を思うとき、現在のどんな苦しみも耐えていくことができる気がします。